

万葉集の成立過程

橋 本 達 雄

1 はじめに

昭和五八年一月一二日、上代文学会は「万葉集はいつできたか」と題してシンポジウムを開いた。講師は慶応大学教授井口樹生、成城大学教授中西進、そして富山大学教授山口博の三氏であり、司会をふつつかながら私がつとめた。はじめ私に講師として発表せよとのことであつたが、じつは万葉の成立論については、一二の論や展望を発表したことはあるにしても、その最終的時点がいつであるかとか、その細かい経緯がどうであつたのかなどについては立入って考えたことがなく、シンポジウムのテーマに関してはその任でないという理由で辞退し、その代りというのではないが、いささかのお手伝いのつもりで司会をお受けしたのであつた。こうした内幕

を記すのは、以下に述べることの言い訳に過ぎぬが、今回編集部からシンポジウムの特集を組むに当り、お前も原稿を寄せよという依頼があつて実のところ大変困つたのである。しかし、シンポジウムの講師の先生方は、万葉集の成立を平安朝の中期ごろに考えておられるので、私は多分奈良朝末か平安朝初頭ごろに成立したとする通説に近からうという編集部の方々の御配慮があつて依頼されたのであらうと考え、お引受けすることにした。したがつて前述したように私にはそのすべてを語るなどということは到底できない。そこで従来考えてきたことを中心にして、日ごろ編纂、成立について思つていふことを中途半端ではあるが述べて責をふさぐことにしたい。

2 二部構造の論

現存の万葉集がある時一度で編纂されたものでないことは、すでに多くの研究によって明らかにされているが、二十巻の中でも、もっとも顕著な相違を見せているのが、巻一から巻十六までの部分と、巻十七から巻二十までの部分である。第一部の十六巻は、分類が施され、ほぼ年代順にかなり整然と編纂されているのに対し、第二部の四巻は一般に大伴家持の歌日記と呼ばれているように、家持の作品を主体として周辺の人々の作品を分類することなく、ただ年代を追って配列したに過ぎぬ形となっている。作品の年代も第一部が天平十七年(七四五)以降の歌が収められていないと思われるのに対し、第二部は巻十七の巻頭部分に第一部に収録し残した天平二年(七三〇)から天平十六年(七四四)に至る三二首を拾遺的に載せるほかは、原則として天平十八年以降の歌だけで構成されているのである。

この二部構造は契沖の『万葉代匠記』(精撰本)以来、おおよそ認められている区分である。論者によって巻十五を第二部に入るべきとする説や(後藤利雄『万葉集成立論』)、巻十七までを第一部だとする説(伊丹末雄『万葉集成立考』)などはあるが、論証上に問題を残しており、こ

の点では伊藤博氏『万葉集の構造と成立』が第一部を巻十五までと付録的な巻十六(現形でない)としつつも、巻十五までの組織が、古(白鳳期)と今(聖武朝を中心とする奈良朝)の構造を貫く「古今倭歌集」として編纂されていることを綿密に論証しているのが説得力に富む。

伊藤説は十五巻本の内部構造を体系的に考察して結論を出しており、その上、巻十五までとそれ以後の目録の研究を通して、前者のそれが誤りも少なく成立も古いこと、巻十五までしか目録のない古写本もあることから、十五巻本の存在したことを裏付けているもので、契沖以来の二部構造説を、たんに外面的徴証からでなく、内側から明らかにしている点で格段の重みを持つものであった。私もこれに従いたいと思う。すなわち、第一部がまず一つの歌集として成立していたところへ、後に第二部が合体して現万葉集が完成しているのである。

3 原万葉は人麻呂による編纂か

そこでまず、第一部に注目することにしよう。第一部の歌は伝承上の古い作者を除いても、実質大化改新(六四五)ごろから始まるので、約一〇〇年間の作品が収録されている。

ではこの長期間の作品を収めた第一部は一度に編纂さ

れたのかというと、実はそうではなく、やはり何度かの撰を経て成長していったものなのである。最初に編まれたのは巻一と巻二の二巻である。だがこれも現在の巻一、巻二そのままではなく、後に増補された痕跡が残っている。その増補部分を除いた以前をいうのである。これを「原万葉」と呼ぶことにする。すでに江戸時代、橘守部は巻一について「今按に此第一巻は、右の藤原宮御井歌までが旧の撰キナにして、次の大宝元年云々以下は其後の書をへなり」(『万葉集墨繩巻二』)といい、巻二についても二七番歌に注して「さて此うた迄は乱れながらも、もと撰みし中なるらんを、以下(筆者注「寧楽宮」の標目以下)は全くの書入也。」(『万葉集松尾手巻四』)と述べていたが、後に沢瀉久孝氏が継承・展開し(『万葉集新釈』ほか)、かなり広く支持されている。標目の不統一、題詞形式の相違などが根拠とされている。沢瀉説によつて原万葉の範囲を示すと、(漢数字は国歌大観番号)

巻一雑歌 一～五三(増補は五四～八四)

巻二相聞 八五～一四〇(増補なし)

巻二挽歌 一四一～二二七(増補は一四六および二二

八～三三四)

のようにである。しかしこの見解はやや不統一な点があつてにわかに従えない。というのは巻二挽歌の増補部分は

「寧楽宮」の標目以後とするのであるが、巻一雑歌の増補部分は「寧楽宮」とある標目よりもはるか以前と認められる点、および巻二相聞には増補なく、すべてを原万葉とする点にある。巻一における原万葉と増補部との境界はかなりはっきりしているので(あるいは中西進の説により四九番歌までを原万葉とするのがよいかもしれないが)、これを規準に考え、また原万葉が後述するように公的な性格を強く持つという点を考慮するならば、巻二挽歌の増補部分も「寧楽宮」の標目より前にわたると見るのが自然であり、相聞にも増補があつたと考えるべきと思われる。すると挽歌の境界は人麻呂の私的挽歌を中心とする部分を除く、高市皇子挽歌以前を原万葉、以下を増補とし、相聞も人麻呂の私的相聞(石見国より妻に別れて上り来る時の歌)以下は増補、以前を原万葉としてよいと思われる。これによつて原万葉の範囲を示すと、

巻一雑歌 一～五三(ただし、五一も増補か)

巻二相聞 八五～一三〇(ただし、一三〇も増補と思われる)

巻二挽歌 一四一～二〇二(一四六を除く)

のようになる。この原万葉の資料は同一と思われ、歌数は一五八首であることからすると、多分最初は一巻であつただらう(ちなみに現巻一は八四首、現巻二は一五〇首)。

すると、はじめは分類（部立）もなく、ただ天皇の代ごととに時代順に配列されていたのであろう。これを二巻に分け、三部立に分類したのは、原万葉に七六首増補し、今見るような巻一と二に仕上げた人たちであつたと思われる。そのことは後述するが、その際、原資料から相聞と挽歌に該当する歌を切り出して別巻（巻二）を立てたので、巻二の題詞に首数を記すことになつたのではなからうか。周知のように巻一の題詞は首数を記さず、巻二は記すという形式上の相違があるので、両巻が同時に同一人の手で編まれたといえないとする説もあるが、本来首数を記さぬ資料から切り出した分を明記したとすればそれほど不自然ではあるまい。

次にそれでは原万葉は、何時誰の手によって編纂されたのであろうか。

いうまでもなく和歌はわが国でもっとも古くかつ伝統的な文芸であつて、宮廷の儀礼や祭式、あるいは個人的な結婚に際して重んじられ尊ばれてきたものであつた。が、一方大化前後のころからの急速な唐風化によつて、宮廷内では晴れの場を漢詩文に奪われ、次第に古くさく魅力のないものとみなされる風潮が強まっていたものと考えられる。しかし、これが壬申の乱（六七二）によつて、唐風を謳歌した近江朝廷が倒されたことを契機に、

乱の勝利者天武天皇の方針のもとに、旧来の伝統文化を重んずる国風が甦り、続く持統朝の安定と繁栄の上に、柿本人麻呂を中心とする万葉和歌の黄金時代が到来するのであつた。

いったい歌集編纂の企画は、それがたとえ小さなものであつても和歌が沈滞して顧みられなくなつてゐる時代に起こりうるはずはあるまい。それはまさに和歌が脚光を浴びて尊重される時代と気運のもとにあると考えるべきである。したがつてこの持統朝に最初の結果がはかられたとすることはきわめて自然に推理できることであらう。

はたして原万葉和歌の時代的下限は文武四年（七〇〇）の人麻呂作の明日香皇女挽歌（一九六八）であつて、三部立のうち、私的な相聞を除いて、ともに人麻呂作および人麻呂関係歌で終つてゐる。持統天皇は大宝二年（七〇二）に崩御するが、孫の文武天皇に讓位したのが持統十一年（六九七）である。天皇はこのころを機に宮廷の偉容を示す宮廷関係歌を編纂し、内外に公布しようという要求とともに、文武天皇の地位を側面から不動たらしめる意味や和歌教育としての意義をもたせようとしたのでなからうか。文武は即位当時わずかに十五歳である。原万葉巻一は歴代の天子たちの事蹟を中心として宮

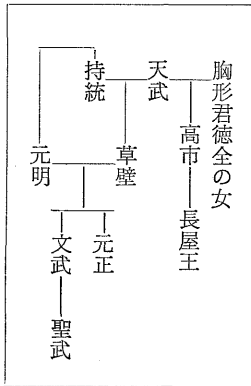
延の偉容を誇示するに足る公的な儀式、儀礼歌、讚歌、行幸、遊宴、皇子・皇女の出遊にかかわる歌がほとんどであり、原万葉巻二挽歌も天皇、皇子・皇女らに対する莊嚴な挽歌によって満たされている。そして相聞もまた天皇・皇后・皇子・皇女らの関係歌を中核に据えていることに変わりはない。

この推定に誤りがないならば、当代の第一人者として持統の信任を集めていた人麻呂がこれに参画しなかつたはずはない。かくして原万葉は持統天皇の意志を体し、人麻呂らが実務を担当してできたものと考えられる。人麻呂の宮廷讚歌や宮廷挽歌など、公的で格調高い歌がすべてこの中に含まれていることもこれを裏付けるといえるであろう。

4 巻三・四の原形部と増補部

原万葉を継ぎ、和歌を蒐集した上で巻一と二に増補した人々は、持統天皇の崩御した大宝二年（七〇二）——これは人麻呂が万葉から姿を消す時期でもある——からおよそ二〇年後に現われた笠金村・山部赤人たちであったと思われる。和歌史は持統崩御、人麻呂の退場を境に旧守的な伝統を守る気風が薄れゆき、ようやく沈滞して行ったが、これが再び息を吹き返すのが、文武天皇の皇子

聖武天皇が即位し、文武の皇孫長屋王が政權を掌握した時代であった。聖武は父文武天折の後、持統の妹で祖母に当る元明天皇と文武の姉、すなわち叔母である元正天皇との両中継女帝の許に、文武の再来を期待され、約束されて育った天皇であり、長屋王は、人麻呂がその薨去に当って万葉集中最大の挽歌を捧げた持統朝の重鎮高市皇子を父とし、文武・持統朝の典型的な皇親政治の再現を夢みていた為政者であった。この宮廷主腦の地盤こそ、和歌に再び脚光を浴びせ、金村・赤人など万葉史上に絢爛とした一時期を画す歌人を輩出させた背景であった（皇室の系図参照）。そしてとくに赤人は人麻呂を慕い、当代の人麻呂を自任していたふしさえ、その作品の人麻呂への倚傍性からうかがわれる。長屋王のもとで彼らが原万葉のあとを継承し、歌集編纂を企画したとしても、これまた当然と思われる。



しかし、古來この時期に編纂が企てられたとする説は出ていない。これには理由があった後に述べるが、ならばその規模は

どれほどのものであったのか。そしてそれはいかにして証明できるのか。その点について述べよう。現巻三と巻四の二巻は巻一と巻二の続篇ないし拾遺として編まれたものであることは広く認められている。巻三は雑歌・譬喩歌・挽歌の三部立で、巻四は相聞のみで一卷をなすので形態は異なっているが、沢瀉久孝氏は原形は雑歌・相聞・挽歌の三部立を擁していたものとし、巻三雑歌の全部と挽歌の前半は天平の初め頃までに誰かの手によって編纂されており、挽歌後半の増補と譬喩歌とは家持の手によるものとし、巻四も「巻三の雑歌と挽歌前半と共に、巻一・二の拾遺として一応編纂されてゐるもので、それに家持が増補して一卷としたものと考へられる」と(注3)されていた。すなわち、「巻三 雑歌全部」「巻三 挽歌前半」「巻四 相聞前半」が原形部であったとするのである。理由は雑歌のみ家持時代の歌がなく、年代の下限も天平五年(七三三)頃と考えられるのに対し、相聞、挽歌ともに家持らの歌も収録し、天平十六年(七四四)頃を下限としていることによる。この見解を継承しつつ具体的にしたのが伊藤博氏であって、

雑歌 現存巻三雑歌の全部(二三五〜三八九) 天平五年頃まで

相聞 現存巻四相聞の前半(四八四〜五七七) 天平二

年頃まで
挽歌 現存巻三挽歌の前半(四一五〜四五九) 天平三年頃まで

とし、雑歌は原本巻三、相聞、挽歌は原本巻四の二巻から成っていたと考えたのであった。(注4)だが、これも雑歌のみ増補がなかったという点にバランスを欠き、その上、現巻三と四とのみ目を注いでいて、他巻との関係が考慮されていないことが気になるのである。これもすでに早くから注意されているが、巻三と四は巻六と巻八との関係がきわめて深いことで、この四巻には共通作者が多いだけでなく、共通資料をもとにしていると思われ、証跡が随所に見出されるからである。横山英、小野寛(注5)両氏の論がその詳細を明らかにしているとおりである。(注5)そこでこれら四巻の関係を頭に置きつつ原形部を推定してみようというのである。原形部の範囲を定めるには、増補の歌を除いてみるのが一番よいことは誰でも気付くことだが、じつは原形部と増補部の歌とは時代の重なるものが多く、年代順に配列し直された現在の段階からは区別が容易でないのである。それですべてこれらの巻を部立別に見ると、

雑歌 巻三、巻六、巻八

相聞 巻四、巻八

のごとく、雑歌と相聞とは他巻にわたっているが、挽歌と譬喩歌とは巻三のみなので、この部分をもっとも原形部と増補との関係がとらえ易い。このうち譬喩歌は現形の体裁が、雑歌と挽歌との間に相聞の代りに家持が考案して補入したものであることが認められており、内容も相聞であるので、先頭の紀皇女の歌(三九〇)のみが原形部の資料からもってきて飾った古いもので、他はすべて大伴家歌群で増補した歌と捉えられる。

挽歌の原形部と増補の関係についてもほぼ同様なことがいえる。この部分の原形部の範囲については、さきの伊藤氏のものとは別に冒頭の聖徳太子の歌から(四一五)和銅四年(七一)の河辺宮人の歌(四三四、四三七)までとする見解が境田四郎氏にあつて、この後に続く神亀五年(七二八)の大伴旅人の歌(四三八)との間に十七年の間隔のあること、旅人の歌以下大伴家歌群が続くことなどを理由としたものであつた。ほかに題詞の書式を重んじてこの河辺宮人の歌の直前の山部赤人の歌(四三一、四三三)までを原形部とする説もあるが、河辺宮人の歌の資料は、ほとんど同じ題詞が巻二増補部にあつて(二二八)、その歌と一連をなしていたと思われる古いものであること(金村歌集の歌か)、大伴家歌群とは異質であること、また年代が隔たり過ぎることなどから境田説に従う

べきと考える。

こうして原形部が大伴家歌群ないし関係歌を除いた部分であるということがいえることすれば、他の部立や巻についても同様であろうと見当をつけることができよう。まず巻三雑歌を例にとつて観察してみる。この部立の歌は巻頭の人麻呂の歌(二三五)から通観の歌(三二七)までは、一二あとで補入したと見られる歌(後述)はあるが、集団的に大伴家関係歌が現われるのは三二八、三五一の部分であり、その後また関係歌がなく、末尾近く三七九以下に現われるという形をとる。およそ四つに区分できるので、それを図示すると、

- A { 二三五 (人麻呂) ・ 二三六 (天皇)
三二六 (門部王) ・ 三二七 (通観)
- B { 三二八 (小野老) ・ 三二九 (大伴四綱)
三五〇 (旅人) ・ 三五一 (満誓)
- C { 三五二 (若湯座王) ・ 三三三 (通観)
三七七 (湯原王) ・ 三七八 (赤人)
- D { 三七九 ・ 三八〇 (坂上郎女)
三八八 ・ 三八九 (若宮年魚麻呂伝誦歌)

のようになる。すなわちB・Dの大伴関係歌群を除いたA・Cが、もとは連続していた原形部だということにな

る。それを証するのは、A 集団末尾の通観が C 集団の二番目に現われてくることにかがわれる (C 集団の最初に出る若湯座王は集中このみの人)。通観は集中ここ二箇所にしか歌のない人だが、それがほとんど続いて出ること
に注意したい。また、A 集団に出る赤人が C 集団にも現われるほか、集中それほど歌数の多くない阿倍広庭・門部王も両集団に顔を見せて連続の相を呈する。C 集団の人では日置少老、生石真人・上古麻呂の三人は他に所見がなく、ほかでは金村、石上大夫、石上乙麻呂 (上と同一人か)・湯原王がいるのみである。この C 集団の大半は金村、金村関係、赤人の歌であって、石上大夫の歌は金村歌集出、湯原王は金村が挽歌を捧げた志貴皇子の第二子であることからすると、金村の資料として大体まとまりをもっていった部分であろうと思われる。

連続していた A・C の原形部を分断して B を増補し、更に D を増補したのである。A の中に出る旅人 (三二五・三二六) と虫麻呂 (三二九・三三二) の歌が、作歌年代および類をもって、やはり増補したものであることは以前述べた。^(注8) また、A に人麻呂と並んで出る刑部垂麻呂 (二六三) が、さきに述べた挽歌原形部にも並んで出る (四二七) 点も注意され、資料の類同を示唆する。垂麻呂は集中二箇所、このみにしか出ない人である。また D の中

に福麻呂歌集の歌と推定される丹比国人の歌 (三八二・三八三) を含んでいるのは、挽歌末尾の増補部にやはり福麻呂歌集所出歌と思われる高橋朝臣の歌 (四八一・四八三) のあるのと軌を一にする。同じく D の中に赤人と若宮年魚麻呂の歌を含む形は、同様の形が巻八春雑歌の増補部にもある。

このように見てくると・雑歌・挽歌の原形部同士と増補部同士との間には資料上いちじるしく類似した傾向のあることが見てとれるのである。

巻四相聞も同じ手続きをとって原形部と増補部を区別することができる。詳述は省くが形としては巻三雑歌と類似して

- a 四八四 (難波天皇妹) 〓 五一六 (阿倍女郎)
- b 五一七 (大伴卿) 〓 五二九 (坂上郎女)

c 五三〇 (天皇) 〓 五四八 (金村)

d 五四九 (作者未詳・大宰府関係歌) 〓 七九二 (藤原久須麻呂の家持への報歌)

のようである。やはり a と c とが原形部で b と d とが増補部となる。こうして巻三、四の原形部はおおよそ復元できる。その末尾の歌を部立ごとに、今見てきた順にその作者を見ると次のようになる

挽歌―赤人 (四三一・四三二)・河辺宮人 (四三四・四三

七)

雑歌—湯原王(三七六・三七七)・赤人(三七八)

相聞—金村(五四三・五四八)

こうして原形部の末尾が金村・赤人らの歌で閉じられている姿は、原万葉が人麻呂とその関係歌で終っていたこととまさしく符合する。そして人麻呂など仰ぐべき先代の歌を拾遺してきて、自分達の歌をその末に据えたのは、先代を憧憬する金村・赤人らの手による撰録ないし蒐集ということを強く示唆するものである。

5 卷六と卷八

ではこれらのことと卷六・卷八とはいかにかかわるのか。まず卷六雑歌から見よう。卷六は人麻呂たち先代の歌は含まず、奈良朝の宮廷歌を収録した巻である。原形部と増補との区分は明瞭でない部分を残すが、はっきりしているのは(イ)巻頭の金村の歌(九〇七)から長屋王の子である膳王の歌(九五四)に至る四八首が原形部だということである。次の(ロ)石川足人の歌(九五五)から旅人の歌(九七〇)まではこれもおそらく大伴家歌群で、増補部だからである。それ以下(ハ)虫麻呂の歌(九七一)から神社老麻呂の歌(九七七)に至る七首が明瞭でない部分となり、続く(ニ)憶良の歌(九七八)以下終りまでは増

補部である。明瞭でないとしたのは天平四、五年の歌であり、天平四年に世を去った阿倍広庭の歌(九七五)だけはその死期に合わせて原形部からこの位置に入れたと思われるので(作歌は当然それ以前である)、この歌を除き増補部のものと考えることにする。

ここで同じ雑歌の部立をもつ卷三との関係を見ると、卷三が先代の拾遺歌群を擁する点が異なるが、卷三原形部Aの末尾近くに赤人歌群があつて、次に大宰府歌群のある点が、卷六の場合ときわめて類似していることで、卷三Bと卷六(ロ)との大宰府関係歌は同一資料を分載したものであることを強く思わせる。そして卷六巻頭の(イ)歌群は卷三原形部Aの末尾に照応しているのであり、これも同一の資料によるものと考えられる。これを分載した人は卷三と卷六との性格をよく考慮してふり分け、それぞれの巻を完成させた家持らであろう。

次に卷八と卷三・四との関係を見る。卷八は雑歌と相聞を四季に分類した巻なので、全部で八部立を持つ。それを以前と同じ方法で大伴家関係歌が現われる以前の原形部と以後の増補部とに分けてみると、ここは不明瞭な部分が少なからずかなりきれいに分割できる。まず春相聞、夏相聞の二部立には原形部がなく、ともに大伴家関係歌で始まるので、あらかじめ除外できる。残る六部立の原

形部末尾の歌人を示すと次のようである。

春雑歌 赤人（一四二四〇七）・作者未詳（一四二八）・若

宮年魚麻呂伝誦歌（一四二九・三〇）・赤人

（一四三二）

夏雑歌 刀理宣令（一四七〇）・赤人（一四七二）

秋雑歌 山部王（二五一六）・長屋王（二五一七）

秋相聞 弓削皇子（一六〇八）・丹比真人（一六〇九）

冬雑歌 元正太上皇（一六三七）・聖武天皇（一六三八）

冬相聞 三國真人（一六五五）

卷八の各部立の原形部を形成する人々は重複する人は一人と数えて二三人である。うち、万葉集中ここにしか出ない人は五人、残り一人のうち、卷三・四の原形部と推定した部分に顔を出す人は一人の多きに上り、他の五人はいずれも卷一と二に出る歌人である。卷八の原形部の資料が卷三・四原形部の資料と強く結びつく関係にあることは明瞭である。またこのうち春雑歌と夏雑歌の末尾がほぼ赤人で閉じられ、秋雑歌はその庇護者長屋王、冬雑歌が太上皇と天皇の長屋王宅の宴歌であることも注意されるのであり、卷三・四原形部の終りの部分ともよく符合する。このことは卷六原形部の末が膳王の歌であったことも思い起こさせる。

6 原形部と卷一・二の増補

ここで4の初めに述べた原万葉の増補資料と増補者について述べよう。増補の範囲は先に示した原万葉以後の歌であるが、卷一増補部に登場する人は二〇人である。そのうち集中ここだけにしか出ない八人を除く残る二人のうち、これまで述べてきた卷三・四・八の原形部に歌を残す人は八人の多きに上る。また卷一増補部に四首を留め、増補部では目立つ存在である長皇子は歌こそないが卷三原形部に名を見せ、人麻呂の献歌を受けている。これを含めると九人までが原形部とつながる。

卷二相聞の増補部は人麻呂と依羅娘子だけで、人麻呂が卷三・四原形部に出るのはいうまでもなく、依羅娘子は卷二挽歌の増補部にしか出ない。またさきに「一三〇も増補と思われる」と記したのは、作者長皇子は卷一増補部にしか歌を留めていない人だからである。

卷二挽歌の増補部では七人のうち五人までが卷三・四・六・八の原形部に現われる。細かいことは省いたが、以上によって原万葉の増補に当って使用した資料が卷三・四・六・八の原形部の資料と同一であったことが諒解されるであろう。一つ注意すべきことを付け加えると、志貴皇子の歌六首のうち五首までが卷一の増補部と卷三

・四・八の原形部に現われ、残る一首も(五一)その位置からして増補と考えられるので、すべてが同一資料から出ていることになる点である。皇子の歌の保持者はその喪去に当って挽歌を捧げ、それを卷二の終りに増補したと思われる笠金村であると見るのがふさわしい。

卷一と二の増補部は相聞を除き、雑歌・挽歌とも靈亀(七五、六)で閉じている。この靈亀は元明天皇が元正天皇に譲位した年の元号で、わずか二年で養老へと続くが、養老五年(七二)には元明が崩御する。元明はさきの系図でも分かるように、人麻呂時代の和歌興隆期を身をもって生きた旧世代最後の人であった。増補を靈亀でうち止めたのは、ここまでを旧時代と認識し、その往時を懂れをもって追体験できる次代の人で、その末尾を自らの旧時代の歌をもって飾ろうとした金村であったに違いない。そしてこの養老末年から聖武天皇の神龜年間(七二四、七二八)にかけて、金村・赤人らの本格的活動の幕が開くのであった。

7 むすび

このようにして原形部の資料はおよそ復元できる。述べたように原万葉を増補した資料も同一と考えられるので、それを含めて集計して歌数を記すと、長歌四二首、

短歌三〇四首、総計三四六首となり、部立別では雑歌二二三首、相聞六八首、挽歌五五首の歌群となる。そして卷三以下十部立のうち(譬喩歌を除く)八部立まで、原形部の末尾が長屋王治政下に宮廷歌人として活躍した金村、赤人とその関係歌、および長屋王関係歌によって閉じられているという顕著な傾向を示すのである。

この歌群はおそらく原万葉を継いで新しい歌巻を編纂しようとの意図で、長屋王の庇護下に金村、赤人たちが、まず前代の歌の拾遺からはじめて集録し、その末尾に自分たちと周辺の歌を配しておいたのであろう。その第一の仕事が原万葉への増補という形で残されたのだと思われる。だが長屋王の政権はまことに短く、天平元年の王の自尽によって、もろくも崩れ去った。国風の顧みられる気運は洩み、金村、赤人らの讃歌も歌われなくなるが、この頃を境に彼らの集録も編纂の企ても中止されたのではなからうか。原形部末尾の姿がそのことを物語っているように。そしてその後の彼らの歌はまた別の資料に入ることになったのであろう。したがって原形部と称した歌群は、その歌数からいって、雑歌と相聞・挽歌とが二つにまとまっていた程度のもものではなかったかと思う。整然と編纂されていたとすれば、後にそれを分解するのはためらわれるからである。そしてその資料が次の

橘諸兄時代の国風昂揚期に家持らの手に入って新たに編纂し直されることになる。

はじめに述べた二部構造のうちの第一部(巻一と二を除く)が諸兄時代に家持らによって編纂されたと考えるところはこれまでの私の論法から推して、まず疑いが無いと思われる。

ほとんどの巻に家持の関与が認められること、天平十七年以降の歌がなく、天平十八年七月家持は越中守として離京していることなどからすれば、その時期は天平十七・八年の間であっただろう。第二部である末四巻がそれに加わったのは、更にずっと遅れると見てよい。しかし家持らの具体的編纂の跡を私は考察したことがない。すでに分限を越えているのである。この辺で舌足らずではあるが擱筆する。

注1 拙稿「万葉集の成立論」(『文学・語学』第76号、昭和五一年四月)

2 中西進氏「原万葉」(『美夫君志』第七号、昭和三九年六月)

3 沢瀉久孝氏「万葉集の卷々の性質」(『万葉集大成1』所収)

4 伊藤博氏『万葉集の構造と成立上』

5 横山英氏『万葉私考』、小野寛氏『万葉集卷八と卷三』

四・六」(『国語と国文学』昭和四四年一〇月)

6 境田四郎氏「卷三・四論」(『万葉集講座』第六卷、春陽堂)

7 中西進氏「古代宮廷歌の終焉」(『成城学園五十周年記念論文集』昭和四二年五月)、後藤利雄氏『万葉集成立論』

8 拙著『万葉宮廷歌人の研究』付録二

9 古屋彰氏「田辺福麿之歌集と五つの歌群」(『万葉』第四五号、昭和三七年一〇月)、原田貞義氏『万葉集の私家集(一)』(『国語国文研究』第四一号、昭和四三年九月)

(付記) 本稿は注1・注8の拙稿および「万葉集の編纂と金村・赤人たち」(『国語と国文学』昭和五十三年九月)に基づいて述べたものである。御併読いただければ幸いです。